２０１５年度

博士学位申請論文

（要　約）

主査　　岩田　みゆき　教授

論文題目

幕末期の老中と情報

――水野忠精による風聞探索活動を中心に――

The members of the Shogun’s Council of Elders and their intelligence activities in the last days of the Tokugawa shogunate, on the subject of Mizuno Tadakiyo.

青山学院大学大学院

文学研究科

史学専攻

佐藤　隆一

本書は、幕末期における老中の情報活動の実態を水野忠精を中心として実証的に究明し、幕末史を再構成して見直してみることを主題とした研究書である。その基本史料となるものは、老中水野忠精に関わる膨大な未刊の史料である。そもそも、日本史の研究、とりわけ近世・近代史研究の歩みのなかで「情報」という観点が重要視されるようになったのは意外と新しく、コンピュータなどの電子機器が一般に普及して高度情報化社会が進展をみた、1970 年代に入ってからである。

とりわけ、幕末維新期は刻一刻と世の中が変転するという将来を予測しづらい社会状況があり、人々が自らの生き方を自分自身で選ばなければならなかったこの時代に、人々が「情報」をどのように収集し、受容し、行動の源泉としたかという問題が注目を集め、今日に至るまで多くの研究成果が生まれている。なかでも、この時期に武士・百姓・町人など幅広い階層によってさかんに記された「風説留」を近代国民国家の前提となる公論世界と位置づけた研究は近年めざましいものがあるが、幕府や諸大名など領主側の情報活動を扱った研究は極めて少ないのが現状である。よって、幕閣の中心となる老中の情報活動をテーマとした本書の刊行の意義も、ここに存在すると考えている。

では、本書の構成は以下の通りである。

序章　　言葉としての「情報」と「風聞」「風説」
第一章　老中と情報に関わる諸問題
第二章　島津久光卒兵上京・江戸出府に関わる情報収集
第三章　将軍家茂上洛をめぐる情報収集
第四章　攘夷・鎖港問題をめぐる情報収集
第五章　元治の庶政委任と老中の往復書翰
第六章　禁門の変に関わる情報収集
第七章　長州藩・天狗党・外交問題に直面する幕閣と情報
第八章　水野忠精老中罷免をめぐる諸問題
第九章　《付編》 彦根・土浦両藩とオランダ風説書
終章　　――まとめにかえて――

【序章】 言葉としての「情報」と「風聞」「風説」

従来試みられることがなかった、言葉としての「情報」と「風聞」「風説」の問題を考察した。これは、筆者が日頃「風聞書」や「風説書」など情報収集に関わる史料を読み込んでいくなかで、その比較材料としての現代用語である「情報」という言葉との対比を試みながら、当時のこれらの言葉の在り様について考察したものである。明治初期に軍事用語として登場し、広範な意味をもつ現代の標準用語に進化した「情報」という言葉に対し、いまだ「情報」という言葉が存在しなかった幕末期においては、「風聞」「風説」「風評」「噂」「紀聞」「沙汰」などの言葉がこれに代わる役割を果たしていた。特に、「風聞」と「風説」は幕府や諸大名などの為政者が政治情報を収集するときにさかんに用いた言葉であり、今日の「情報」に匹敵するような信憑性の高い報知内容を示す骨太の意味を持ち合わせていた。

「風聞」と「風説」とを比較した場合、意味が重なり合う部分が多いが、微妙に異なる部分もある。基本的に「風聞」は、老中ら為政者が目付や町方役人などの探索方を目的地に派遣した結果報告された内容など、主に聞き込みを行うことにより得られた内容を指すのに対し、「風説」は相手方が話して報告した口上の内容やすでに報告された既成の書付類を筆写してまとめた内容を指すことが多いことを指摘した。よって、いわゆる「風聞書」と「風説書」との性格の違う部分があるとすれば、ここに由来するということができる。概して、探索と聞き込みを基本動作とする「風聞」は、受身的要素が多い「風説」よりも能動的な意味を持ち合わせていることも指摘した。

【第一章】 老中と情報に関わる諸問題

本書の主題である水野忠精の情報収集活動に入る前に、江戸時代を通じて諸職を統括して幕府政治の中枢にあった老中の情報収集に関わる諸問題について検討した。

まず、「一、幕末期の老中」では、幕末期の弘化３年（1846）から明治元年（1868）にかけての、老中の任免一覧表（表 1）と若年寄の任免一覧表（表 2）を作成して提示し検討した。これによると、安政の五か国条約締結（1858）を機に、老中はそれ以前の約６倍、若年寄は約７倍の速さで人事が入れ替わる異常な状況であったことが明白となった。これについては、①幕末期の老中や若年寄の人事は異例の抜擢が行われるケースはあったものの、基本的には譜代大名のなかから登用するという伝統的な枠組みを出るものではなく、これが人材枯渇という深刻な事態を生む原因となったこと。②文久の幕政改革（1862）以来、一橋慶喜・松平慶永ら徳川家一門の人材が幕府政治のなかで大きな地位を占めるようになり、幕府が一枚岩になれない状況が続いたこと。③幕末期

に老中ら幕閣が抱えた政治的課題はそれ以前の時代に比べて圧倒的に多く、また困難を極めたこと、を主な理由としてあげた。これを受けて「二、幕末期の征夷をめぐる問題」では、開国政策を推進する幕府が自らの成り立ちの本質的な部分である「征夷」（攘夷）という職掌を多くの政治的勢力から問い直され、その実行を迫られたことにより、その政治的基盤を大きく揺り動かされ、幕府内部においても激しい派閥抗争を繰り返すことになったことを指摘した。「三、井伊政権による風聞書」では、水野忠精による風聞探索活動とは格好の比較材料となる大老井伊直弼政権による風聞書の性格について、①京都風聞、②水戸風聞、③江戸風聞、の順を追って解説した。「四、水野忠精と風聞書」では、水野忠精の代々の家系について説明した後に、忠精の政治家としての性格について、先行研究や父忠邦の書翰などをふまえて検討し、さらに水野家文書風聞探索関係史料についても、その性格について説明した。

【第二章】 島津久光卒兵上京・江戸出府に関わる情報収集

文久 2 年（1862）の島津久光卒兵上京・江戸出府という異例の事態に対し、老中に就任したばかりの水野忠精が多くの人材を駆使して展開した情報収集活動の内容について検討した。

「一、九州・畿内における情報収集」では、島津久光が鹿児島を出発するとともに、その先発として江戸に派遣されていた薩摩藩士堀次郎（後の伊地知貞馨）の行動や、熊本藩の儒者国友半右衛門を中心として忠精に詳細な九州風聞を伝える「熊本ニ而聞書」、金三郎・嘉吉なる人物が寺田屋騒動などの京都風聞をまとめて江戸の幕閣に書き送った風聞書、さらには上方風聞を充分にふまえた目付大井十太郎の意見書などの内容を検討した。「二、三嶋宿を通じた風聞書」では、在府の藩主毛利慶親（敬親）を周旋するために東海道を東進して続々と江戸入りする長州藩士の動向を探索すべく、関東取締出役の面々が街道筋に出動して展開した情報収集の展開について述べた。「三、東海道宿場通行の長州藩士」では、「二」の流れで長州藩士がどのようなかたちで江戸入りしたかを表 4 に示して分析した。「四、江戸市中の情報収集」では、「二」「三」と同じ頃に町奉行三廻役（定廻・臨時廻・隠密廻）が江戸市中で展開した長州・水戸・土佐などの諸藩の動静についての探索活動と、関東取締出役が清河八郎と思しき男を追跡・調査した内容などを紹介した。「五、島津久光江戸出府をめぐる諸情報」では、関東取締出役が江戸に入る直前の島津久光一行の動静や、伏見での寺田屋事件の模様などをまとめた風聞書の内容を検討した。

【第三章】 将軍家茂上洛をめぐる情報収集

3 代将軍徳川家光の上洛（1634）以来約 230 年ぶりで行われた 14 代将軍家茂の上洛をめぐり、これに随行した老中水野忠精が事前に行った情報収集や、これらに基いて上洛の旅中に展開した政治的行動について検討した。「一、将軍家茂上洛の決定と情報収集」では、忠精の上洛随行にともない、近江国大津に派遣された忠精の山形藩歩横目田村五百代が収集した京都風聞や、攘夷論が沸騰するなか、吉田守三郎ら長崎地役人 4 名が江戸の忠精に書き送った九州風聞の内容などを紹介した。また、忠精の家臣で儒者の塩谷甲蔵（宕陰）も続々と主君に重要な諸情報を伝え、意見を具申している。塩谷は、前掲の薩摩藩士堀次郎が自宅を訪問して述べた島津久光卒兵上京・江戸出府のいきさつや、蒸気船を使用しての海路による上洛を推めるなどの積極的な意見を述べている。「二、将軍上洛準備と京都情報収集」では、上洛を前に田村五百代が京都における攘夷激派勢力による度重なる旧井伊政権派の人物への凄惨なテロ事件の模様などを江戸の忠精に書き送っている。また、塩谷甲蔵の知人で儒者の安井息軒が忠精の諮問に答えるかたちで意見書「時勢一隅」を提出しているが、ここには当時の社会や幕府内部の疲弊状況が端的に示されている。「三、英艦横浜集結と将軍上洛経路の変更」では、生麦事件の賠償問題で抗議した英国艦隊が横浜港に集結したため、幕府は急きょ上洛経路を陸路に変更したが、これは忠精ら四老中が幕府諸役人に発議することなく、即時に独断で決定したものであった。「四、将軍上洛と賀茂社行幸」では、上洛した将軍家茂一行が朝廷から「将軍職委任」「諸藩へ攘夷決行を沙汰すべし」とするとの命を受け、さらに事柄によっては朝廷が直接諸藩に命令を下す場合もあり得るとする表明を受けて完全なる庶政委任の目的をくじかれ、さらには孝明天皇の命により攘夷祈願のための賀茂上下社行幸に家茂らが随行させられるという、朝廷方にすっかり翻弄される場面場面を順を追って述べた。

【第四章】 攘夷・鎖港問題をめぐる情報収集

幕末期に沸騰した攘夷論の本質に迫るべく、この章では幕府が庶政を委任される代わりに朝廷から受け入れて実行しようとした攘夷と、一方外国船に砲撃を加えて暴走する長州藩の過激な攘夷とを比較することを主な筋道に、様々な史料を分析して考察を試みた。

「一、 将軍家茂帰東問題と石清水社行幸」では、すっかり朝廷方に翻弄された幕府の上洛一行に対し、随行員のなかから即時に帰東すべきであるという内容の意見書を紹介した。また随行員の目付池田長発が在京幕閣に提出した意見書には、外国人を説得して戦闘行為に及ぶことなく国外に引き払わせ、挙国一致の体制をつくりあげることが得策であるとする意見を述べている。しかし、結局幕府の一行は東帰することなく、家茂欠席のもとで孝明天皇の石清水社行幸に随行

することになる。「二、攘夷をめぐる幕府と長州藩」では、幕府が朝廷に攘夷の期限と約束した文久 3 年（1863）5 月 10 日に下関海峡を通行する外国船に砲撃を加えた長州藩に対し、水野忠精は詳しい情報を入手するとともに、大坂において長州藩留守居役北条瀬兵衛を呼び出して、攘夷決行についての本質的な論議を行った。ここでは、忠精は外国側と通商条約を破棄する事態となるにせよ、外国側が襲来して来ない限り、こちらから軍事行動を起こしてはならないとする考えを表明した。しかし、長州藩側はこの幕府の姿勢を弱腰外交ととらえ、勝敗を度外視して挙国一致で攘夷を決行しなければ国体を守ることはできないとし、両者の主張は水と油の関係で決裂している。「三、横浜鎖港交渉と家茂再上洛」では、文久 3 年 8 月 10 日に幕府の攘夷決行は横浜鎖港と決定したが、直後に長州尊攘激派勢力が会津・薩摩両藩をはじめとする勢力から京都を追われる八月十八日の政変が発生した。水野忠精・板倉勝静両老中は改めて横浜鎖港は実際には不可能であるとの意見を一橋慶喜に述べたが、慶喜はあくまでの鎖港に固執し続けた。実際に、外国側との鎖港談判は決裂し、幕府の鎖港政策は袋小路に向かって行く。

【第五章】 元治の庶政委任と老中の往復書翰

元治元年（1864）1 月の家茂再上洛により、老中は忠精ら将軍に随行した在京老中と留守を預かる在江戸老中とに分かれたが、ここでは双方の老中が交わした計 17 通にのぼる往復書翰「秘翰」の詳細な内容を分析した。ここでは、老中どうしが本音の内容を情報交換し合うという展開となっている。

「一、家茂再上洛をめぐる政情と『秘翰』」では、17 通の往復書翰を年月日順に整理した表 5 を提示し、当時の政治状況とこれらの書翰の性格について説明した。「二、両都両港開市開港問題（『秘翰』の内容・その 1）では、在江戸老中から在京老中へ、松平容保京都守護職解任に抗議しその復職を希望する旨や、外国側と江戸・大坂開市と新潟・兵庫両港開港の問題が切迫しているので、上洛中に条約勅許を得られたい旨、また、山陵修復工事を担当した宇都宮藩の家老戸田忠至は要注意人物である旨、などが伝えられている。「三、天狗党の乱発生（『秘翰』の内容・その 2）」では、在江戸老中より在京老中へ、元治元年（1864）3 月 27 日に水戸天狗党の乱が発生し、その沈静化に苦慮している旨、混迷する関東の情勢については今後目付佐々木脩輔を上京させて報告したいこと、小笠原長行の老中格再任を強く望むこと、老中有馬道純の退役のこと、横浜鎖港の即時決行を主張する水戸藩主徳川慶篤と一橋慶喜の意向は何としても阻止してほしいこと、などが通信されている。「四、横浜鎖港問題の行き詰まり（『秘翰』の内容・その 3）」では、在江戸老中より在京老中へ、英国公使オールコックとの横浜鎖港交渉が暗礁に乗り上げていること、

水戸天狗勢が下野国太平山に移動し誠に心痛である旨、などが伝えられ、一方在京老中の水野忠精から在江戸老中へ、小笠原長行老中格復帰についてはこれを進めたい旨などが通信されている。

【第六章】 禁門の変に関わる情報収集

元治元年(1864)7 月 19 日に京都で朝・幕・藩の関係を大きく揺るがす禁門の変が発生したが、水野忠精は江戸にあって入念な関係情報の収集につとめていた。本章では、変発生前から事後の状況に至るまで、忠精のもとにもたらされた膨大な情報を分析し、彼の人的関係とその政治的方向性についても言及した。

「一、禁門の変発生」では、京都における政治的復権をめざして山崎・天龍寺・伏見に進軍した長州藩軍の動静について、当時朝幕間の周旋にあたっていた米沢藩(藩主上杉斉憲)が家臣堀尾保助を通じて江戸の忠精のもとに詳細な風聞内容を伝えている。また、老中に就任したばかりの阿部正外は自らが上京するとともに、その先発として家臣を上京させ、江戸の忠精に禁門の変やその直後の京都情勢について逐一報告させている。「二、禁門の変をめぐる水野忠精の情報収集(その 1)」では、忠精が京都からもたらされる禁門の変に関わる風聞をまとめた書付「巻懐」の内容について分析する。そのなかには、押し寄せる長州勢からその安全を守るために孝明天皇を御所から彦根城に退避させる計画があるとする彦根遷幸説も記されている。また、山陰地方の鳥取藩から松江藩に、長州藩へ外国船が襲来した場合にどのような対応のしかたをするかという問いかけをした文書の内容などもみられる。「三、禁門の変をめぐる水野忠精の情報収集(その 2)」では、禁門の変の激しい戦闘や町家の火災の模様、乱発生当日に御所の警備にあたっていた加賀藩世子前田慶寧が突如京都を脱出して近江国海津に引き上げたこと、さらに禁門の変後の京都情勢については、高松藩主松平頼聰より紀伊藩家老を通じて、江戸の水野忠精へのその詳細な内容が伝えられたことも明らかになった。また、敗走する長州勢に対する岡山藩の対応や、長州藩士村岡伊助が同藩尊攘激派の暴走について内部告発をした史料の内容も紹介した。「巻懐」の内容の豊富さ、風聞内容の正確さは、何よりも水野忠精の情報収集能力の高さを示しているといえよう。

【第七章】 長州藩・天狗党・外交問題に直面する幕閣と情報

禁門の変や四国艦隊下関砲撃事件などによる長州尊攘激派の挫折や幕府による横浜鎖港政策の事実上の撤回などの情勢のなかで、長州藩の処分をめぐる問題、水戸天狗党に関わる佐原騒動と水戸藩への拝借金の問題、さらには在江戸老中の要としての水野忠精が取り組んだ外交問題について検討した。

「一、塩谷甲蔵・中村敬輔両名意見書にみえる長州征討論」では、塩谷は忠精への意見書で、禁門の変で朝敵扱いを受けた長州藩については、即刻藩主毛利敬親・広封父子の官位を剥奪し、西国大名へ長州藩征討の号令を発するべきであるとし、横浜鎖港に固執し幕閣の足並を乱した在京の禁裏守衛総督一橋慶喜を征長の総督には任ずるものの、凱旋後は江戸に引き戻してその政治権力を剥奪すべきであるとの強い意見を述べている。また塩谷は同じ儒者の中村敬輔の忠精への意見書も取り次いでいる。中村もまた、無謀な攘夷を行って幕府の開国互市政策に立ちはだかった長州藩を征討せよとする意見を具申している。「二、第一次長州征討の開始」では、長州征討に際して、将軍家茂を積極的に進発させようとする阿部正外・松前崇広・水野忠精らと将軍進発反対派を形成した諏訪忠誠・牧野忠恭らの老中同士の対立が浮き彫りとなった。「三、天狗党の乱終息と佐原騒動をめぐる状況」では、水戸天狗党が下総国香取郡佐原村で略奪や殺戮を行った事件について、被害を受けた村々の住民らが忠精ら幕閣に切実な救済の訴えを行った内容、さらには、老中板倉勝静が天狗党沈静化を目的に水戸藩に下した拝借金が逆に天狗党の軍資金となってしまった事件について検討した。「四、江戸幕閣と外交問題」では、外国側が幕府に、長州藩の下関砲撃事件の賠償金 300 万ドルの 3 分の 2（200 万ドル）を免除する代償として、条約勅許・兵庫先期開港・関税率改正を要求してきたことに対する、忠精ら幕閣の対応の仕方などについて検討した。ここでは、幕閣が天狗党の蜂起や佐原騒動に対して断固たる処断ができず、また薩摩藩が派閥抗争を繰り返す幕府の政治的能力を見限って雄藩連合へ向かうなど、いよいよ幕府倒壊への警鐘が鳴り始めたことを指摘した。

【第八章】 水野忠精老中罷免をめぐる諸問題

水野忠精の老中としての最後の大きな任務となった江戸協約（改税約書）が結ばれるまでの経過について、外交折衝を軸に検証し、第二次長州征討中の慶応 2 年（1866）6 月 19 日に老中を罷免されるに至った事情についてもできる限り関係資料を駆使して、国内の政治状況および外交問題から検討した。また、これらの問題を考証するために、元治元年（1864）6 月から慶応 2 年 7 月・8 月にかけての老中と英・仏両国公使との往復書簡とその内容を年月日順に列記した表 6 と表 7 を提示した。

「一、江戸協約に関する外交折衝」では、慶応 2 年 5 月 13 日に諸外国との間で締結した江戸協約の調印にいたるまでの経過について説明した。「二、水野忠精老中罷免をめぐる状況」では、幕府主導の兵庫先期開港を軸とする積極的な開国政策を推進しようとした阿部正外・松前崇広両老中が、これに反対する一橋慶喜らの画策により朝廷から老中を罷免された後も、両名に同調していた忠精は罷免されることなく、8 か月余にわたり老中職にあった。その主な理由として、度重なる政変で老中の人材が枯渇してゆくなか、忠精は江戸協約の調印など外交問題への手腕を期待されて老中職を続行したと考えられることを指摘した。「三、老中罷免後の水野忠精」では、老中罷免後の忠精の生活と戊辰戦争における忠精の山形藩の動向について説明した。特に、新政府の命令により上京した忠精と子の藩主忠弘が京都に軟禁されてしまい、藩主不在となった山形藩が戊辰戦争において苦心惨憺する事態となったこともとりあげた。

《付編》【第九章】 彦根・土浦両藩とオランダ風説書

老中の情報収集活動について考察するための恰好の材料として、彦根・土浦両藩文書中に残存するオランダ風説書をとりあげ、書誌的な分析をしたうえで、老中の海外情報の扱い方、とりわけその情報ルートについて考察した。

「一、彦根藩文書オランダ風説書の書誌的考察」では、彦根藩文書の 8 点のオランダ風説書のうち 6 点は別段風説書であり、また「大久保亮之記」の印が押してある 4 点の風説書は元来が土浦藩側が所蔵していたものと判断でき、その後何らかの理由で彦根藩井伊家文書中に移入されたものであることを指摘した。「二、土浦藩文書オランダ風説書の書誌的考察」では、土浦藩大久保・土屋両家文書中に残存するオランダ風説書の書誌的考察を行った結果、老中の海外情報の伝達経路の一端が明らかになった。「三、彦根・土浦両藩文書オランダ風説書をめぐる諸問題」では、章のまとめとして、オランダ風説書は「オランダ商館長→長崎奉行→老中」という手順で上がってきたものを、老中一座が点検した後に彼らの裁量により、情報伝達が必要と思われる幕府諸有司や諸大名などに回覧させるという公的なルートが存在する一方、老中の命令系統以外のところで筆写される無数の私的ルートによる情報伝達も行われていたことを指摘した。なお、最後に彦根・土浦両藩文書オランダ風説書の主要な情報内容をまとめた表 8 を提示した。

【終章】 ――まとめにかえて――

本書でこれまで考察してきた内容のまとめをし、今後の研究に向けての展望をしてみた。

「⑴『風聞』『風説』の性格」では、「情報」という現代用語が登場する以前の幕末期に、「風聞」「風説」「風評」「噂」などの言葉がこれに代わる役割を果たしていた実態についてのまとめをし、これらの用語の性格については、今後も歴史学的・国語学的両方の視点から検証していく必要があることを指摘した。「⑵老中の情報活動」では、水野忠精を実例とした幕末期の老中の情報収集の大きな枠組みとして、「１．幕府の公的機関」（老中相互の連携、関東取締出役、江戸町奉行三廻役、寺社奉行、目付、長崎地役人など）、「２．自藩の人材」（田村五百代、塩谷甲蔵、朝生清左衛門など）、「３．大名間の連携」（岡藩、米沢藩、白河藩、会津藩、高松藩など）、の3つに分類できることを指摘した。すなわち、老中という職掌にあるからこそ組織的に展開できる「１」の公的機関からの情報に加えて、「２」の信頼できる自藩の人材を用いて重要なエリアと認識した地域の情報収集を行わせており、さらに「３」の厚い信頼関係のある他の大名からも豊富な情報を供給されて相互の協力関係を作り出していたことを解説した。また、この3つの情報ルートの系列は、少なくとも江戸時代を通じて老中の情報源の基本的な枠組となったことは間違いないと考えられることも指摘した。さらに、「⑶幕末政治と老中」では、幕末期に老中や若年寄が異常なスピードで短期間に入れ替わる現象が起こった主な理由として、⑴その人材登用の範囲が基本的に従来の譜代大名の枠を出ることがなかったこと、⑵幕末期は政治的争点が次々と推移し、一橋慶喜や松平慶永ら親藩の徳川氏一門が幕政に参画して老中の専権能力が弱まるなかで、幕府において一枚岩の結束ができない状況が続いたこと、⑶幕末期には幕府がその成り立ちの一部である征夷の職掌を各方面から問い直され、たえず攘夷の決行を迫られ、幕閣内で激しい派閥抗争が展開されたこと、を指摘した。最後に、幕末期の老中ら幕閣が反対勢力との衝突を繰り返しながらも優れた情報収集能力により現状を的確に把握し、外国勢力との軍事的衝突を避けようとする一貫した政策を推進してきたことは、幕府の崩壊という結果にはなったものの、独立国家としての日本を守り抜くことになった政治として、再評価を与えてもよいのではないかと指摘して、本書の締めくくりとした。